

葦笛（一幕）

宮本百合子

青空文庫

人物

精霊

三人

シリクス　ダイアナ神ニ侍り美しい又とない様な精女^{ニムフ}

ペーン　マアキュリの長子林の司

こんもりしげった森の中遠くに小川がりボンの様に見える所。

春の花は一ぱいに咲き満ちてしずかな日光はこまっかい木々の葉の間から模様の様になって地面をてらして居る。あまつたるい香りがただよって居るおだやかな景色。

三人の精霊がねころんだり、木の幹によっかかりしてのんきらしくしゃべって居る。小蜂が一匹とんで居る。

第一の精霊　サテサテマア、何と云うあったかな事だ、飛切りにアポロー^{ドソ}殿が上機嫌だと見えるワ。日影がホラ、チラチラと笑って御ざる。

第二の精霊　アポロー殿が上機嫌になりや私共までいや、世の中のすべてのものが上機嫌

じゃがその中にたった一つ嬉しがりもせず笑いもせなんだものがあると気がするあの木鼠奴が通りすがりの木の枝からわしに声をかけおった。何じやろ、今日のよな日のあてものにはもってこいと云うものじゃ……

第一の精霊　嬉しがりもせず笑いもせなんだ？　一寸思えばうす暗い中にうごめいてござるブルートーかさもなくて——ものがもの故あとが一寸はつづかぬワ、まいずれその近くに違いあるまい。

第二の精霊　コレ、若い人、何をそのよにだまってござる。年はとっても私等^{ワシラ}はこの通りじゃ。とりのぼせぬまでにうかれるのも春は良いものじゃワお身の唇はその様にうす赤くて——はたから見ても面白い話が湧いて来そうに見える。口あくど齒にしみる風は願うても吹いては居ぬ、サ、今のあてものも云って見なされ下らない様でも面白いものじゃ。

第三の精霊　私しや考えて居るのじゃ。

第一の精霊　とは御相搦な、考える事のなさそうなお身が考えて居るとは、——今のあてものかそれともほかの事かな。

第三の精霊　自分の事を考えて居るのじゃ。あてもものよりもむずかしいものと見えて、す

けをたのみたいほど迷つて居るワ。

第二の精霊 自分を？ 若い人には有り勝な事じゃワ、自分の心を機カラクリ械かなんぞの様に

解剖フツケをしてあつちこつちからのぞくのじゃ。あげくのはてが自分の心をおもちやにしてクルリツともんどりうたしてそれを自分でおどろいてそのまんま冥府へにわかじたての居候となり下る。妙なものじゃ。

第一の精霊 その様に覺つたことは云わぬものじゃよ。どこの御仁かわしや得知らんがあの精女の白鳩の様な足にうなされて三日三夜まんじりともせなんだ御仁があると風奴がたよりをもて来た。叶う事なりや、も十年とびもどりたいと云うてじゃそうな。心あたりはないかな？

第二の精霊 もうその先はやめにしよう、陽氣のせいか耳がいたむワ。デモナ、口のさきではどうにでも□□るものじゃ、トツクリと胸に手を置いて考えて見なされ、日光ヒにてらされたばかりじゃなくはげた頭が妙に熱うなる骨ばった手がひえて身ぶるいが出る事が必ず有ろうナ。ヘツ罪ツミ作りな……

第一の精霊 若い人がござるは、年功でもない、一寸はつつしまねばならぬワイ。なんぼ春だと云うて御主のはげはやっぱりがやいてあるのに、口元に関所を置いてとび出す

ならずものは遠慮なくからめとる様に手はずをなされ——そう思わぬか？

第三の精霊 思うも思わぬもわたしやそんなひまをもたぬ、考えるにせわしいワ。考えれば考えるほどわかりにくくばかりなる心を新規蒔なおしに考え始めにやらぬ。

第二の精霊 マ、そのまま考えたいなら考えさせて置きなされ、わし等に損は行かぬことじゃ。ところでじゃ、あの精女の姿を思い出して見なされ、思い出すどころかとつくに目先にチラツイてある事じやろうがマア、そのやせ我まんと云う仮面をぬいで赤裸の心を出さにやらぬワ、昨日^{キノウ}今日知りあつた仲ではないに……

第一の精霊（チラツと第三の精霊の方をぬすみ見しながら）ほんとうにそうじゃ、春さきのあつたかさに老いた心の中に一寸若い心が芽ぐむと思えば、白髪ของ そよぎと、かおのしわがすぐ枯らして仕舞うワ。ほんとに白状しよう、わきを向いて居なされ——、お互さまじゃよ！

第二の精霊 わしの目玉の黒い内はハハハハ……

マ良いワ、があのにリンクスの美しくさと云うたら……ま十年若かつたらトナ、お互に思うのも無理であるまいと自分できめて居るのじゃ。ましてこの頃の氣候で倍にも倍にも美しく思われるワ。

第三の精霊はフツと首をあげて一つとこを見つめながら二人の話をきく目の中には悲しみと怒りがもえて居る。うつむきにねころんで居たのを右の手を台にして横になる、耳をすまして首が一寸かたむいて居る。

第一の精霊　だが及ばぬ事じゃ、いかな物ずきでもしわくちやなはげおやじに……ウフフフフおかしい様な氣もするワ、いい年をして子の様な精女の姿にうなされるとは——はかりきれない美しくしさをもつて居ると見える。

第二の精霊　若さと美しくしさの盛の年をして居るペーン殿のこの頃の眼の光りをお主は氣づいてござるか？　わしのすばしい眼の奴は、ちゃんと見ぬいてしもうたワ、恋のやつこになつてござるとナ。云うまでもなくシリックスの肌のしなやかさをしとうてじゃ。

第一の精霊　アポロー殿がとび切りの上機嫌の今日でさえ嬉しがりもせず笑いもせなんだものと云う謎はとけたワ。ペーン殿は、年がまだ若いワ、髪が房々としなやかで頬は豊かで——うらやましい事じゃ、今はなやんでござつても末の日の望はあるワ。

第三の精霊（ひくくうなされてうなる様に）私も同じ事でなやむのじゃ。ペーン殿には末の日の望があるが私は、ただ無駄になやむばかりじゃ——。——ただ無駄に——

第二の精霊　オヤ、若い御仁は何と云いなされた？——同じ事でなやむのじゃとナ？　と

がめはせぬワ、無理だとも思わぬワ、じゃが、マ、ただながめるだけの事で御あきらめなされと云わねばならん様な様子をあの精女はして居るじゃ。

第三の精霊 ——

第一の精霊 だれでも一度はうけるあまつたるい苦しみじゃナ。そのあつたかい涙をこぼして居られる中が花じやと、私達の様になつては思われるワ。私達が若かった時——お事位の時には幸いあの精女の様な美くしい女は居なんだからその悲しみもうすいかなしみであつたのじゃ。お事の若い心にはあの精女はあまり美くしすぎたの………

第二の精霊 ほんにその通りじゃ。美くしすぎたのじゃ世の中すべての男に——

第三の精霊はうなだれてあつちこつちと歩き廻つて居る。まわりには何となく重い気分がにじんで居る。

若い男は自分の老いた時の事を、老いた人達は自分の若かったことを思つて居る。三人ともだまつたまんま木の間を行ったり来たりするうちに一番川に近い方に居る第二の精霊がとつぴようしもない調子で叫ぶ。

第二の精霊 来る！ 来る！ ソラ、あすこに、私達の——

するどく叫んであとはポーツとした目つきで向うを見る三人の目が皆そこに集つ

た。

白い着衣に銀の沓をはいてまぼしい様なかおをうつむけてシリックスが向うの木のかげから出て来る。

かすかな風に黄金色の髪が一二本かるそうに散つて居る。手には大理石の壺を抱えて居る。

何か考える様な風に見えて居る。

三人の精霊は一つかたまりになって息のつまる様な気持で一足一足と近づいて来る精女を見て居る。精女はうつむいたまんま前に来かかる。

第一の精霊 もうお忘れかね、美しいシリックスさん。

少しふるえる様な強いて装うた平気さで云う。

精女 マア、——何と云う事でございましたらう、とんだ失礼を、——御ゆるし下さいませ。

しとやかなおちついた様子で云う。そしてそのまんま行きすぎ様とする。

第二の精霊 マア、一寸まって下され。今もお主の噂をして居ったのじゃそこにソレ、花が咲いてござるワ、そこに一寸足をのして行つても大した時はつぶれませぬじゃ、そう

なされ。

第一の精霊　ほんにそうじゃ。お主の細工ものの様な足が一寸も休まずに歩くのを見ると目の廻るほど私は気にかかる――

精女　いつもいつも御親切さまに御気をつけ下さいましてほんとうにマア、厚く御礼は申しあげますが急いで居りますから――この山羊の乳を早くもって参らなくてはなりませんでございますから――

第一の精霊　お急ぎ？　それでもマ年寄の云う事は御ききなされ。

精女　お主様がさぞ御まちなかねでございましょう。私は早う持つて参じなければならないのでございます。

第二の精霊　ここに居る三人は皆お主をいとしいと思つて居るものばかりじゃ故お主の御怒にふれたら命にかけてわびを叶えてしんぜようナ。

この間第三の精霊は木のかげからかおだけを出して絶えず精女を見て居る。

第一の精霊　^{オナゴ}女子のかたくななのは興のさめるものじゃ、良い子じゃ聞き分けて休んでお出でなされ。

精女　まことに――我がままで相すみませんでございますけれ共お主様に捧げました体で

ございますから自分の用でひまをつぶす事は気がとがめますでございまして今日は御許しあそばして――

第一の精霊 お主様に捧げた？ おしい事じゃ、ほんにおしい事じゃ、お主の侍るお主――ダイアナ神は御事のために命をすてて御下さらんじやろがここに居る三人の精霊――世の中にあるだけの精霊は皆お主のためなら命までもと云うておるじゃ。まして私共の様に白髪のない栗色の髪の房々した若い精霊の目が御主に会った時のあの露のしたたりそんな輝きと会わなんだ時のあの曇り様をお主は知ってじやろうが……

第二の精霊 そうじゃほんにおしい事じゃ、若々しい美しくいお主は自由な体で氣がるに花をつみうたをうたい舞うて居るのが良いのじや、「時」は遠慮なく立つて幾十年か立つと私共の様な――こんなみにくくはあるまいがとにかく年を取らにやならぬじゃ、若い中――ほんに短かい若い中を自由に美しくくすぐさじやああまりおしいワ、お主の様にましてうつくしい人ハナ、……

この間精女はうつむいて足の先で小さな花をつつついて居る。

第三の精霊は木のかげに居るまんまで手でかおを押えて居る。

第一の精霊 ソレ、その様に自然に咲きほこつて居る花を足の先でじやらして何も忘れて

居るのがお主にはよく美しくしさとつりあつて居るのじゃナ。今の一日はそうして気ままに歌をうとうて舞をまうて居なされ、声の美しい駒鳥も姿のよい紅雀もつれて来てお相手さしよう。

第二の精霊　そうして居なされ。お主にそうして居られると私共は涙のこぼれるほど安心なおだやかな心持になれるのじゃ。美しい花をもつ人はたれかがぬすみに来はせなんだかと思わずらうと同じに私共はなやむのじゃ。

精女（涙ぐみながらいかにもこまつたらしく小さなこえで）お主さまが御まちなかでございます。

第一の精霊　御待ちかね？　ダイアナ殿は山羊の乳をまつてござるのじゃ、私共はまつとそれより貴いものをダイアナ殿よりまちなかねて居るのじゃ。

まちなかねて気の狂いそうなものさえある！

第二の精霊　お主の心の花の咲くのをまちなかねて居るのじゃ、幼子の様なお主の瞳にかがやきのそわるのをまちなかねて居るのじゃ。

第三の精霊はかるくふるえながら木のかげから出て来る。精女、二人の精霊は気がつかずに居るといきなり馳つて精女の前にひざまずく。

二人の精霊はあとじさりをし精女はおどろいてとび上る。

精女 アラー？ マア——……

第三の精霊 これまでに——お主を……命にかけてとまで思つて居るのじゃ。

精女 お立ち下さいませ、泥がつきます。私は貴方さまにそんなにしていたくほど身分の高いものではございませんですから……

第一の精霊 云うでござる、身分の高いものではございませんから——

良う御ききなされ美しいシリリンクス殿。

年老いた私共は、その若人のするほどにも思われなければ又する勢ももう失せて仕舞うたのじゃ——が年若い血のもえる人達はようする力をもつてじゃ。

身分の高い低いを思つてするのはござらぬワ。

体中をもつて狂いまわる血の奴め^{ヤッ}が思う御人の前にその体をつきたおすのじゃ。

第二の精霊 私共にも、出来る力をもつた時はあつたが幸か不幸か自分の体をなげ出すほど美しい精女は居らなんだ故死なずにもすんだのじゃ。

ま十年若かつたら、つくづく思われるのじゃワ。

第三の精霊はかおを手でおおうたままシリリンクスの足元につつぷして居る。指の

間からかすかなこえを響かせて云う。

第三の精霊 何とか云うて下され、美しいシリックス。お主のその美しいしおらしいな目ざしで、そのしなやかな身ぶりで私の血は段々なくなつて行つてしまふ。アア、どうしていいやら、私は心臓ばかりのものになつたのじやあるまいか――

かがやかしいシリックス――、私の命の――何とか云うて下され何とも思うまに……

精女（おどろきにふるえながらたくなつて身動きもしないで居る。壺をしつかりかかえて）

第三の精霊 だまつてござるナ、何故じや、私のこのやぶけそうに波打つて居る鼓動がお主にはきこえなんだか、この様にふるえる体がお主には見えなんだか――お主の着物はひだ多く縫うてあるに心はただまつたいらな小じわ二つも入つて居らぬ、何とか云うて下され、――もう私は口がきかれぬほど――

第一の精霊 精女殿、哀れに思われなんだか？

若い人の心は悶えるのも人一倍くるしみのますものじや。火の様になつた若人の頭に額に一寸手を置いて御やりなされ、さもなくば髪の毛の上にかるい娘らしい接吻をなげて

御やりなされ。

第二の精霊　して御やりなされ、悪い大神の御とがめをうくるほどの事ではない。

精女、ためらいながら左の手につぼをもちかえてまつしろな右の手を栗毛の若い精霊の髪の上に置く。

若い精霊は涙をこぼして居る。

第一の精霊　キツスをして御やりなされ額の上に――

精女（はつきりと）私はお主さまに朝と夕に御手にするほかいやでございます。

第二の精霊　お主さまに――。ほんに体を捧げて御ざるワ。

第三の精霊　有がとう、美しいシリックス、何とか云うて下されたんだ一こと、死ねとでも――

精女（沈黙。右の手を下にたれてうつむいて居る）

二人の精霊は向うを向いた木によっかかって何か小声で話し合つて居る。

第三の精霊　何とか云うて下され精女、死ねとでも云うて下され、たんだ一ことで良いワ。
そのバラの花をつんで置いた様な唇からもれる言葉をきけば私は死んでも、――ナ？
死ねとでも云うて下され――

第一の精霊の目は狂った様に輝いて、顔中の筋肉がズーツとしまつて居る。

精女（足元を見つめたまんま震える声で）云つても良いんでございましょうか、——お死に遊ばせ。

第一の精霊は飛び上つて精女の目を見つめ神経的に高笑をする。二人の精霊もその声にくちを向いて二人の廻りをとり巻く。

第一の精霊 シリンクスお主はこの若人に何をお云いなされた？ あ的笑い声は——あんまりとりとめもない声だった——

精女（かおを赤くしながら無邪気に）アノ、私はこの方が死ねと云えとおっしゃいましたので申したんでございますが——この方はそれをきいて御笑いなされたまででございませう。

第二の精霊 死ね？ 思い切つた事をお主は御云いなされた——コレ若い人、お主はそれをほんの心で聞いては大した事が出来ぬともかぎらぬ、じょうだんだと聞き流され、三つ子の云うた事だと思つて居なされナ？

第三の精霊 私のほんの心できいてもなにも大した事等は起らぬ、私がこの精女殿に——まっしろけな幼児の様な心をもつたこの御人にたのんで云うてもらつた事じゃ。

第二の精霊　その様な事をたのむとはサテサテ——ほんとうに御主にはこの精女殿が美しくすぎたのじゃ。

第三の精霊　私はこの上もない安心を得たのじゃ。

嬉しい事だ、のぞみの満ち満ちた事だ。

二人の精霊と精女とは若人のうす笑をしながら云つて居る事をおどろきの目を見はつてきいて居る。第三の精霊は頭をかるくふつて遠くに流れて居る小川を見つめるといきなり張りのある響く声で、

第三の精霊　美しい精女殿、お二人の御年寄——さらばじゃ、この上ないよろこびのみちたところへ行く——青い水草は私の体をフンワリと抱えて冬の来ぬ国につれて行くワ、一寸の間頭の上に置いてたもった精女殿の指のほそさとうでの白さを夢見ながら、

三人のかおをジツと見まわす。二人の精霊はサツと第三の精霊のまわりによる。

若人は思い出した様に又笑つて着物をひるがえして一足前に進む。二人は一足あとにタジタジとしりぞくと若人は青草の上を白い足で目まぐるしいほどに川の方へ走つて行く。二人の老人はかおを見合せてホツと溜息をつきながらだまって涙ぐみながらトボトボとそのあとを追うて行く。

精女は力のぬけた様に草の上に座ってつぼをわきに置きながら。

シリックス お主さまからしかられよう——私はただあの人が云って呉れと云った事ばかりを云ったのにあの人はあんなに川にとんで行ってしまった、二人の人も行って——私はマアこのひろい中にたった一人になってしまった。

細々と云って涙をふく。川のあべこべの方から林の司のペーンがみどり色のビロードの着物に銀の飾りのついた刀をさして来る。シリックスの涙をこぼして居る様子を見てサツとかおを赤くする。それから刀の音をおさえてつまさきで歩いて精女のわきによる。やさしげな又おだやかなものしずかな調子で、

ペーン お前は泣いて居るネ、そして又大層美しい。

精女はおどろいてかおから手をはなし身をしりぞける。

ペーン 何にもそんなにおどろくことはない。私はお前をどうしようと思うのではないから、どうして泣いて居る？

精女（沈黙。壺のふちを小指でなでながら耳をまっかにして居る）

ペーン 何故だまって居る？ そんなに沈んだ泣いた眼をして居ると御前の美しくさは早く老いてしまうから——誰かが御身をつらくしたなら私は自分はどうかされても仇をうつ

てあげるだけの勇氣を持つて居るのだよ。

精女 誰にもどうもされたものではございませんけれ共——今ここに参りましたら老人と若人と三人の精霊が居りましたその若い人は私の前に体をなげ出しましたんでございます。そしたら年とった人達が髪の毛の上に手を置いて御あげ額に一度だけキツスして御上げつて申しましたから私はその通りに髪の上に手をのせてあげたんでございます。

ペーン お前が？ お前が？ 私が三度あんなに心をこめた文をやつたのに何とも云わない人が？ そうしたらどうおしだ？

ペーンはねたましげなイライラしたしまつたかおをして手をふつてせきたてる。

精女 そうはいたしましたけど——私は何も申しませんでした。そしたら若い人は私に死ぬと云え、死ぬと云えと申しましたから私は云つてしまいました。

若い人は川の方にとんで行つてしまつて二人の老人もそのあとを追つて行つてしまいました。私は何の事だかわかりませんで——ただ、一人ぼっちになったんで悲しゅうございました。

いかにも小供らしい口調で伏目になりながら云う。

ペーンはシリックスの話のあんまり子供らしいのと泣きぬれてました美しくしさに

みせられて頬をうす赤くしながらそのムツチリした肩を見ながら、

ペーン　ほんとうにマア、お前は美しい体と心をもって居る事、私に御前の手の先だけさわらして御呉れ、その象牙ぼりの様な手の中に入れる事を――

精女　御さわりにならないで下さいませ。

ペーン　何故？　私はきたないものなんかは一寸もさわりやしない――お前の手をさわりたいために私の花園で一番美しい花の精をぬって来たほどだもの。

精女　御やめ下さいませ、何となく悪い事の起る前兆の様な気が致します。

ペーン　悪い事？　私は若い、それで相応に見つともないだけに美しい、それが若い美しいやさしい精女に恋をする、何故悪い事だろう？

精女沈黙。重って来た困る事にすき通る様なかおをして壺のかすかに光るのを見る。ペーンはそこをおを眉のあたりからズーツと見廻して神秘的の美しくさに思わず身ぶるいをしてひくいながら心のこもった声で云う。

ペーン　マア何と云う御前は美しい事だ。そのこまっかい肌、そのうす赤くすき通る耳たばをもつて居る御前は――世界中にある美しいものにつける形容詞を集めても御前の美しくさを云う事は出来まいネー。

精女
――

ペーン お前はだまって居る。そのしまった口元、見つめた目つき――美しい事だ、ほんとうに。ビーナス殿の頬の豊かさも眼の涼しさも御前にはキット及ばないに違いない。精女 そんなにおっしやらないで下さいませ、そんなにおっしやられるほどのものじゃあございせんですから――

ペーン まっしろな銀で作った白孔雀の様な――夜光球や蛋白石でかざった置物の様な――私はそう思つて居るのだよ。

お前の御主のダイアナも月の冠をかむつて御出でるから美しいのだ、まばゆい車にのつていらつしやるから立派なのだ。

お前の方がよっぽど美しくいと私は思つて居るのだ。

精女、沈黙。

ペーン ネー、シリックス？ 私は一寸ためらわずにハッキリと「お前を愛して居る」と云えるのだよ。私の前にどんな尊いものがあつてもどんなに立派な人が居ても――私はお前の心から侍えて居るダイアナに誓つても――アアそれはいけなかった、月は一晩毎に変わるからいつでも同じ太陽に誓つてお前を愛して居るのだよ、どうぞ何とか云つて御

呉れ。

ほんとうにお前は私の命なんだから……

精女 おつしやらないで下さいませ——どうぞ。

ペーン どうぞ云わして御呉れ、それでどうぞ御前の手にさわらせて御呉れ、どうぞ私の心を考えて御呉れ、アアお前はあんまりきれいな心をもって居る！

精女 ——

ペーン シリンクス！ 美しい精女！ 私の気が狂いそうになって来た。私の目の前に——心の前にお前の顔が渦巻いて——あんなに調子をとった足なみで迫って来るじゃないか？ 私は何を云うんだろう。

私はどうしたら好いんだろう、アア私の^{タマシイ}霊！

ペーンはシリンクスのわきにつつぷす。シリンクスも座って居る。

精女 アア私はどうしよう、さっきの若い人はキツト川に入ってしまったんだろう、あの人は死んでしまったんだろう。そして又この方まで……アア恐ろしい。

お主さまダイアナ様！ どういたしましょう？

私の体と心と一緒にふるえて居ります。

あの人も——この方も——

立ち上りながらシリリンクスはおそれて叫ぶ。

ペーンはその銀の沓をはいた足の上に体をなげかける、シリリンクスとはびのきざま叫ぶ。

精女 おやめあそばせ！ こわうございます！ 息がつまりそうでございますワ。アラ、アポローさまがあんなにケラケラ笑っていらつしやいます、冥府の御使者がソラ！ この草のかげから目ばかり出して居りますワ！

たまらくなつた様に又ペーンとならんで草の上につつぷす。

ペーンはソーツとよつておしげなく見えるくびにキッスしようとする。

シリリンクスとはび上つて云う。

精女 おさわりになりました？ おさわりになつたんでございますか？ アア私の終りの日がとうとう参りましたワ、お主さまのところへも参れませんが、アアほんとうに終りの日が参つたんでございますワ。

私は恥うございます。

身をひるがえしてかけ出す。ペーンもすぐそのあとを追う。

精女 お許し下さいませ、お主さま！ ダイアナ様！

恥かしいんですございますワ。終りの日が来たんでございますワ。

シリリンクスは小川の方に向ってかけながらとぎれとぎれに高い声で云う。

ペーン もう何も云わない、もう何もしない！ かけるのをやめてお呉れ、どうぞシリリンクス！ 美しい……、アア——

ペーンも追いながら叫ぶ。

シリリンクスの速力はだんだんにぶくなつて、

恥かしいんですございますワ。

と叫ぶ声も細くなる。も一寸でペーンがおいつく様になる。小川の岸に来てしまった。

精女 恥かしいんですございますワ！

ペーン シリリンクス、美しい！

精女は水煙をたてて川に飛び込む。小さな泡が二つ葦の根にうく。

ペーン オオオ、シリリンクス、お前は！

しぼる様な細い声で云う。まわりの葦にひびいて夢の歎きの様な好い音を出す。

ペーンはそれをジツとききながら、

ペーン　アア、あの響が……シリnkスの姿に似た響がああ美しくしのせめてもの形見になるのだ。一生死ぬまでこの響を聞いて居なくっちゃ私はああ美しくかった精女にすまない……

ペーンは葦を切つてつたでからげてその先に唇をあてて響を出す。

ペーン　あああのシリnkスの心が音にささやく、あの精女の姿がうき出して来る、——シリnkスの笛——それでいい、私のシリnkスを思つたほどに……ああ美しい姿は美しい響になつて残つてしまつた！

夢の様な、歎く様な細い声に川辺にすわつたまんま吹きならす。

幕。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十八卷」新日本出版社

1981（昭和56）年11月25日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第6刷発行

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2009年10月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

葦笛（一幕）

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>